こころの未来研究センター滞在記

レベッカ・マッケンジー（イギリス・プリマス大学講師）
Rebecca MCKENZIE

京都大学こころの未来研究センターで過ごした４カ月間は本当にかけがえのないものだった。

私がセンターの内田由紀子准教授と共同研究を始めることになったきっかけは、2011年に京都で開催された感情に関する国際学会であった。数日間の京都滞在の素晴らしさもさることながら、学会も学際的で示唆に富んだものだった。とりわけ内田准教授による文化と感情、そして日本文化の対人関係についての基調講演は刺激的で、私にさまざまな新しいアイディアをもたらしてくれた。かつて社会人類学を専攻していた私は、比較文化の問題に長く関心を持っていたこともあり、講演終了後、すぐに彼女に共同研究ができないかともちかけた。イギリスに帰国してから、彼女の協力を得て日本学術振興会の外国人特別研究員に応募、幸運にもパスして日本での４カ月間の滞在が実現する運びになった。

京都ではセンターの学際的アプローチに非常に感銘を受けた。学際的研究は実りが多いものの、通常は別々の学部からいろいろな人を引っ張ってきてチームを作らなければ実現しない、困難なものであることをよく知っていたからである。

センターでの研究、教育、学び

京都大学は外国人研究者にとって非常に滞在しやすい環境にある。私たちの研究プロジェクトは自閉症スペクトラムの診断と介入、そして支援サービスにおける保護者と療育者のパートナーシップについての日英比較研究である。日本に行く前、私は本当にこうしたプロジェクトを実施できるのかを懸念していた。なぜならば私は日本の自閉症支援について知識がなかったし、日本語を話すこともできないからだ。しかしセンターの支援と京大内の共同研究者を得ることにより、予想していた以上のことを実施することができた。センターのメンバーが質問紙調査やシナリオ課題、そして行動実験の翻訳を含めた作成をともに行ってくれ、さらにはデータ収集や分析についても手助けをしてくれた。また、他の研究者との橋渡し的支援も行ってくれたおかげで、彼らとの研究相談をスムーズに行うことができた。センターのメンバーを含め、発達心理学者や臨床心理学者、精神科医の前で研究計画を発表する機会を設けてもらうこともできた。そのおかげで教育学研究科や霊長類研究所、京大病院の研究者たちとの非常に有益なネットワークをつくることができた。結果的に効果的な研究チームをつくることができ、その中で私が受けたアドバイスやサポート、研究のアイディアのすべてに感謝している。また、他大学や自閉症を支援する学校などを訪れることもかない、日本における教育システムと自閉症児への支援サービスなどを知る重要な機会を得た。

研究発表の様子

京大では学生と教員両方の気分を味わうことができた。いくつかのセミナーで自閉症研究に携わる研究者とディスカッションを行い、ワークショップや授業にも出かけていった。そして内田准教授が教育学研究科で開講していたアカデミック・イングリッシュ演習の授業にも出席した。私がネイティブの英語話者として学生たちの役に立つことが嬉しかった。このクラスは非常にオープンで打ち解けた雰囲気であり、内田准教授と学生たちとともに過ごしたことはとても良い思い出になっている。日本の学生がどのような授業を受けているのかを知ることは良い機会であったし、そこで知り合った学生の紹介で、自閉症の家族を支援するボランティアグループに参加することもできた。

神戸大学や東京の武蔵野東学園、京都の幼稚園や児童支援センターの訪問は、私を助けてくれる人たちがいなかったら実現しなかった。センター

の一員でいられたことを心から誇りに思うと同時に、これからも連携していきたいと考えている。日本の文化や研究環境を学ぶことができただけではなく、学際的アプローチのすばらしさを学ぶことができたと思う。

サポート体制

多くの人から仕事上だけではなく日常的なサポートを受けたが、その質のすばらしさに感銘を受けた。日本に到着する前からリエゾンオフィスのスタッフが多くの支援を行ってくれて、日本への渡航や住居に関することをアレンジしてくれた上、到着後は自転車を借りることができ、買い物をする場所なども教えてもらった。少女時代からまったく自転車に乗ることがなかった私にとって、こうした一つひとつのことが冒険であった。リエゾンオフィスのスタッフは私の生活をスムーズにしてくれる「ライフライン」であり、今ではとても良い友人たちだ。彼女たちの親切を決して忘れない。

センターや他の研究科の研究者たちも多くの面で非常にサポーティブであった。内田准教授をはじめセンターのスタッフは研究熱心で、彼らとともに働き、彼らの友人であることが私の喜びであった。指標をつくり、翻訳をし、実験協力者を探し、データを集める、そのすべての過程を皆が支援してくれた。オフィスをシェアしていた研究者たちもとてもフレンドリーに私を迎え入れてくれた。共同研究の機会を与え、すばらしい経験をさせてくれた内田准教授に非常に感謝しており、これからも彼女との共同研究を続けていきたいと願っている。京都を去るまで、多くの友人を得ることができるなど、研究生活だけではなく日常の生活も含めてとてもすばらしいもので、私はまったく孤独や心配を感じることがなかった。

京都での生活

リエゾンオフィスの勧めで、京都滞在中には京大にほど近い「国際学生の家」で過ごすことになった。ここでの生活はとてもおもしろいもので、イベントなども頻繁に企画されており、それらを通じて私はさまざまな国からやってきた学生や研究者と友人になることができた。さらに、センターで知り合った友人やその家族との楽しい思い出もつくることができた。一緒にお寺を巡ったり、お祭りに行ったり、美味しいものを食べに行ったりした。

京都を語るなら神社仏閣のことは外せない。宗教を持たない私にとっても、多くの神社仏閣を訪れることはスピリチュアルな経験であった。週末はよく寺社にでかけ、庭をじっくり眺めたりした。京都の寺社は混雑している一方で非常に静かで落ち着いた空間であり、美しい瞬間が数多くある。滞在中いくつもの寺社を訪れたが、それでも回りきれなかった。京都は訪問するに値する街だ。

リエゾンスタッフのメンバーとともに、賀茂川にて（右端は娘）

日本の他の地域を訪れることもできた。大原、奈良、大阪、城崎温泉、竹野、そして東京。私の家族も１カ月間日本にやってくることができ、ともに旅行し、日本の景色を楽しむことができた。気候だけでなく、文化や料理など、日本での生活はイギリスとは多くの面で違っている。私の家族は京都での快適な暮らしを存分に満喫したので、今でもそれらを恋しく思う。心打たれるほどの研究環境、友人とのランチ、神社仏閣、オレンジの自転車、市場のそぞろ歩き。そして友人たち。願わくば京都をもう一度訪れ、センターの同僚たちと、再びともに仕事がしたい。

（翻訳：内田由紀子）

こころの未来研究センターのスタッフや学生たちと